

オペラ座の怪人

2005(平成17)年2月12日鑑賞〈三番街シネマ〉

★★★★



監督・脚本＝ジョエル・シュマッカー／出演＝ジェラルド・バトラー／エミー・ロッサム／バトリック・ウィルソン／ミランダ・リチャードソン／ジェニファー・エリソン／ミニー・ドライヴァー（ギャガ・ヒューマックス共同配給／2004年アメリカ映画／143分）

……舞台の「ミュージカル」でしか知らなかった『オペラ座の怪人』が劇場映画版に。新聞紙上での評判は耳にしていたものの、あのミュージカルは超えられないだろうと思っていたが……？ 映画を観てこの予測が大まちがいであったことを思い知らされた。感動的な歌声と圧倒的な場面の迫力にビックリ！ 2時間23分の間、ずっと感動、感動また感動の連続！ 歌好きそしてミュージカル好きの私としては、今年のトップに挙げたい作品。高一の時に7回も観た『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）以来の大感激！



3人の圧倒的な歌唱力に大感激！

ミュージカルは何といっても役者の歌唱力が最大のポイント。ましてや、全世界で8000万人と観客動員数ではあの『キャッツ』を抜いて、ギネスブックのトップに立つのも時間の問題だといわれているこのミュージカルは、ストーリーの面白さは当然ながら、やはり歌が決め手。特にクリスティーヌがはじめて舞台に立ってアリアを歌うシーンでは、まさにオペラ歌手としての歌唱力が試されることになる。しかし、さすがにアメリカは広い。そして役者のすそ野はバカ広い。普通にいろいろな映画に出演している役者の中にこんな才能を持ったヤツがいたのかと唖然とするような人選で主役3人が決定されている。そして、いずれもその歌唱力は抜群！ 天が二物も三物も与えているヤツがハリウッドにはたくさんいることを痛感！

歌姫クリスティーヌは18歳！

クリスティーヌを演ずるエミー・ロッサムは1986年生まれで、7歳の時からメトロポリタンオペラの舞台に立っている本格的なオペラ歌手。そして同時に、最近私が観た映画の中では、『ミスティック・リバー』（03年）と『デイ・アフター・トゥモロー』（04年）に出演していた、あの美少女！演技力と歌唱力の両方が不可欠なこの映画の歌姫役にはまさにピッタリだ。ファントムの仮面を剥ぎ取ったり、ファントムとラウルという2人の男性の愛に揺れたり、そして、醜いファントムの顔面を抱きしめてキスをしたり、女性としての内面的な演技も素晴らしいが、何とんでもその「天使の歌声」に酔いしれること請け合い！

オペラ座の怪人ファントムは？

オペラ座の怪人ファントムを演じているのは、『サラマンダー』（02年）、『トゥームレイダー2』（03年）、『タイムライン』（03年）に出演していたジェラルド・バトラー。『タイムライン』ではじめて主演を演じただけの1969年生まれの俳優だが、その歌唱力は抜群！

オペラ座の怪人ファントムを演じるについて第1のポイントとなるのは、その右顔面を覆う仮面。仮面も舞台衣装であり、小道具の1つとして重要だが、他方、これがあまり目立ちすぎると役者の顔がわからなくなってしまう。ちなみに、宝塚歌劇版の「オペラ座の怪人」である『ファントム』では、紫色の仮面を付けたり外したりしながら歌い踊っていた。これはやはり主役の和央よしかの美しい顔を見せたり隠したりしなければならないからだが、その苦労の程がありありと……？そして第2のポイントは、仮面を剥ぎ取られ素顔をさらした時の顔の醜さの程度。これはきわめて難しい問題……。その点についてのこの映画の出来は……？

歌姫を支える「白馬にのった王子様」役のラウルは？

もう1人の主演ラウルはオペラ座を買い受けて新たな支配人となった大金持ちだが、クリスティーヌとは幼なじみ。そして美しく成長したクリスティーヌがフ

ファントムの教育よろしきを得て、オペラ座のプリマドンナとしての実力を備えていることを知って驚くとともに、当然のように彼はクリスティーヌの「白馬にのった王子様」になった。そこで必然的に生じるのが、オペラ座の支配権をめぐる確執の他、クリスティーヌをめぐるファントムとの男同士の葛藤。オペラ座の怪人として圧倒的な力を誇っていたファントムに対してラウルは敢然と立ち向かったが……？ こんな若き日のラウル演ずるのは、『アラモ』（04年）で砦守備隊の若き指揮官を演じたパトリック・ウィルソン。パンフレットによれば、このパトリック・ウィルソンもブロードウェイの舞台に立つ実力派だとわかりまたビックリ。2人の剣による決闘シーンは映画なればこそその迫力だし、劇場版でおなじみの地下の湖でのハイライトシーンもお見事！ もっとも、最後に2人の勝敗を決したのは2人の力の勝負ではなく、クリスティーヌのファントムへのキスだった。が……。

映画だから作ることができるすばらしいドラマ性

この映画は1919年、パリでのオークション会場の場面から始まる。競り落とされた小物は、ファントムが所有していた、猿がシンバルを打つオルゴール。これがある女性との競争に勝って競り落とした老人は誰？ そう、この老人こそが今をさかのぼること約50年前の1870年代、あの歌姫クリスティーヌと結ばれたラウル。この競りに負けたのがマダム・ジリー（ミランダ・リチャードソン）。そして競り落としたオルゴールが捧げられた墓に眠っているのは、当然あの歌姫クリスティーヌだ。

映画は魔法の杖！ ありとあらゆる状況設定を可能とする芸術が映画だ。したがって、舞台ではその表現が難しい「時計の逆回し」をいとも簡単にやってのけたり、人物の今と昔を同時並行的にリアルに描き出すこともできる。この映画版『オペラ座の怪人』では、若き日のラウルと年老いたラウル、そして若き日のバレエダンサーのメグ・ジリー（ジェニファー・エリソン）と年老いたマダム・ジリーを同時並行的に描き、ミュージカルにはないすばらしいドラマ性を生み出している。

重要な語り部そして橋渡し役のジリー

上記のように、この映画には年老いたマダム・ジリーと若き日のバレエダンサーのメグ・ジリーの2人が登場する。年老いたマダム・ジリーは、映画冒頭の猿のオルゴールのオークションのシーンや怪人の生い立ちを物語るシーンで、ストーリー展開上重要な役割を果たしている。これに対して若き日のジリーはオペラ座のプリマドンナであるカルロッタやその代役としての歌姫クリスティーヌの影に隠れているだけの存在だが、これがメチャ美人かつスタイル抜群そしてカッコいい女優。イギリスでは有名な女優・ダンサーとのことだが、今後ハリウッド映画にも主役級で登場してほしいもの……。

怪人の生い立ちもリアルに！

『オペラ座の怪人』という名前は知っていても、このミュージカルを観たことがない人は一体何のことかサッパリわからないはず。そしてミュージカルを観ても、なぜ怪人ファントムがオペラ座の地下に住みつくことになったのかについては、十分な説明はされていない。さらにその醜い顔の秘密も……？ ところがこの映画では、その醜い顔のために見せ物小屋にいたファントムの子供時代が描かれている。看守を殺して逃げ出したファントムを救い出し、以降ずっとオペラ座の地下に身を潜めさせたのは、あのマダム・ジリーだった。

『オペラ座の怪人』名物の(?) シャンデリアは3つ！

ミュージカル『オペラ座の怪人』では劇場「オペラ座」の豪華絢爛たる大道具としてのシャンデリアが最大の見せ物。そして怒り狂ったファントムがこのシャンデリアを落下させ、オペラ座そのものを破壊してしまうシーンが最大の見せ場。ミュージカルではこのシャンデリアを観客席の上で移動させるなど最大の演出効果を工夫していたが、映画ともなると、何と現実にはシャンデリアを落下させ、それを撮影することに……。もっとも、ホンモノを潰してしまうのはもったいないから(?)、破壊用のシャンデリアはホンモノによく似せたレプリカとのこと。さらにこの映画では、1919年と1970年代という50年も違う時代を同時並行で描い

ているため、シャンデリアもその時代に合わせて2種類。したがって、なんとこの映画では3つのシャンデリアを製作したというから驚き……。

さすが世界の都、花の都、パリ

パリのオペラ座とは、劇場名ではなく興行団体としての総称だそうだ。その詳しい解説はパンフレットを見ていただくこととして、私が感心したのはこのオペラ座の物語が19世紀末に存在していたということ。アメリカでは、1861年～65年の間南北戦争を戦っていたし、日本でもやっと明治政府が成立したのは1868年のこと。したがって、1870年代のパリのオペラ座で華麗な出し物をパリの上流階級の人々が楽しんでいた頃は、アメリカや日本では鉄砲の弾が飛び交っていたことになる。そんなアメリカや日本と比べれば、パリが世界の都、花の都と称されるのは当然！ 14～16世紀のイタリアを中心としたルネサンス文明や15～16世紀のスペイン・ポルトガルを中心とした大航海時代などを考えても、やはり西ヨーロッパの文明の歴史やその質の高さには驚くばかり。そんな素地のもとに、この『オペラ座の怪人』という作品の台本や音楽が成立していることをあらためて再認識！

酔いしれる数々の名曲と二重唱、三重唱の美しさ

今や誰でも聞いたことがあるはずのあの印象深い『オーヴァチュア』（序曲）をはじめ、『ザ・ミュージック・オブ・ザ・ナイト』や『ポイント・オブ・ノー・リターン』そして『マスカレード』など『オペラ座の怪人』にはたくさん名曲がズラリ！ 舞台ではこれらの歌が高らかに歌い上げられると会場は拍手喝采となるのだが、映画ではそうはいかない。ホントは大きな拍手を送りたいのだが、それを我慢しているとたちまちスクリーンは次の場面に……。これが映画のいいところであり、物足りないところ……。逆に舞台は、演ずる者と観客との一体感が生き物であり、それが面白いもの。

この映画版『オペラ座の怪人』では主役の3人にほぼ平等に歌うチャンスがあるし、二重唱、三重唱もそれぞれの場面を盛り上げるのに絶好のタイミングで配置されている。バックいっぱいに流れる演奏にのって歌われる『オペラ座の怪

人』や『エンジェル・オブ・ミュージック』そして『オール・アイ・アスク・オブ・ユー』の二重唱、三重唱の歌声はそりゃすばらしいの一言。通常の映画料金で、舞台と同等あるいはそれ以上の「至福の時間」を過ごすことができることまちがいなした。

『ハムレット』と『オペラ座の怪人』に共通するものは？

劇場で大人気となっている「出し物」を映画化するのは大冒険！ なぜなら、既に大好評を博している劇場版と比較されるわけだから、よく出来ていて当たり前、ちょっと出来が悪いとボロクソに批評されるのがオチだからだ。『南太平洋』（58年）、『ウエスト・サイド物語』（61年）、『マイ・フェア・レディ』（64年）など、映画化されたアメリカのブロードウェイやロンドンのウェストエンドの劇場版ミュージカルはたくさんあるが、私は『オペラ座の怪人』の映画化はかなり難しいと思っていた。また、シェークスピアの作品では『ロミオとジュリエット』は、オリビア・ハッセー主演による『ロミオとジュリエット』（68年）をはじめとしてすばらしい映画がたくさんあるし、シェークスピア自身を劇中劇で描いた『恋におちたシェイクスピア』（98年）は大傑作だった。しかし私はその中で『ハムレット』の映画化は難しいと思っていた。ところが1996年に映画化された『ハムレット』を観て驚き、またこの映画版『オペラ座の怪人』を観て驚いたのは、その美術や衣装の絢爛豪華さだ。この両者には何かが共通しているのでは、と思ってパンフレットを見ていると、その共通点は、衣装を担当したアレキサン德拉・バーンにあったことを発見した。なるほど、なるほど……。

アカデミー賞3部門にノミネート！

第77回アカデミー賞の作品賞、監督賞、主演（助演）男優（女優）賞などの主要部門（？）は、『アビエイター』『サイドウェイ』『Ray／レイ』などに負けたものの、この『オペラ座の怪人』が美術賞、撮影賞そしてオリジナル歌曲賞の3部門にノミネートされたのはさすが。各部門においても強敵ぞろいだが、私は最優秀美術賞とオリジナル歌曲賞は是非この映画が獲得してほしいと願っているが……。

2005(平成17)年2月14日記